

インタビュー

飯能の森林資源を活用した地域循環型企業 質を追求し「西川材」ブランド化を目指す

大河原 章吉 協同組合フォレスト西川理事長



おおかわら あきよし
大河原 章吉 氏

- 1949年 埼玉県飯能市出身
- 94年 協同組合フォレスト西川 代表理事
- 2003年 大河原木材株式会社 専務取締役
- ◆協同組合フォレスト西川沿革等◆
- 1993年 法人登記
- 95年 創業
- 97年 埼玉県彩の国工場 認定
- 99年 飯能市阿須に埼玉県産材モデル
木造住宅建設し見学者へ開放
- 99年 「木材乾燥と木材含浸処理方法」米
国特許取得
- 2000年 「間伐・間伐材利用コンクール」に
おいて全国木材組合連合会長賞受賞
- 04年 「杉」及び「桧」が国土交通省準不
燃材認定取得
- 同年 「フェノールを含む木材の着色方
法」特許取得
- 07年 国産材利用推進の「木づかい運動」
において林野長官賞受賞
- 08年 「成形物製造方法」特許取得

森林文化都市を宣言する飯能市にあるフォ
レスト西川は、飯能、日高、毛呂山、越生に

またがる森林から産出される地域材の需要拡大を志す木材業若手後継者の勉強会から有志が集まり、誕生した協同組合である。

組合員が協同で地域産材の加工施設プレカット工場をもち、木材の高付加価値加工をメインの事業として行っている。また、エンドユーザーの要求に応じて、西川材を現代の生活に活かすための研究や提案、見学者の受け入れなど情報発信基地としての役割も担う。地域森林資源を活用し、「西川材」ブランドの確立や地域林業の活性化に取り組む。

国産材不況の中で、需要拡大の方向を模索 川下に目を向け、プレカット工場を建設

——協同組合設立に至った経緯について伺う前に、飯能で生産される木はなぜ西川材と呼ばれるのですか。

荒川支流の入間川、高麗川、越辺川の流域一体は古くから良質のスギやヒノキが育つ土地でした。江戸時代には、伐採した木を筏に組んで川を下って江戸に運んでいました。江戸の人は、「西の川からくる良い材木」で西川材、生産地を西川林業地と呼ぶようになりました。西川林業地は、近世林業史にも全国の有名産地と共に名を挙げられ、首都圏に一番近い林業地です。西川材は、枝打ちや間伐を丁寧に行って育てているため色、艶がよく、年輪が緻密で節の少ない優良材として扱われてきました。

昭和50年代に入ると、国産材は圧倒的な量と品質と低価格の輸入材に押されて厳しい状況になりました。そんな中、飯能市街地の木材業の若手後継者が集まり、西川材を含む地域材の需要拡大に向けた勉強会を始めました。



林業家の長年の努力の賜物です

伐採にも高度な技術が必要です

木を生かすも殺すもまずはこの製材の技術にかかっています

素材の乾燥仕分けなどで厳しい品質管理を行います

木を知り木を生かす製品作りには豊富な経験と確かな技術が必要

討論を重ねた結果、みんなで協力して川下に近いところで事業展開をすることも合意されました。私たちは、ずっと川上で製材を中心でしたが、「これからはエンドユーザーに近い川下の住宅産業を目指し、需要拡大につながる打開策が見えてくるのではないか」ということになりました。4人の有志と飯能市森林組合で協同組合フォレスト西川を設立し、プレカット工場を建設しました。その後、日高町と名栗村が飯能市に合併したため、飯能市森林組合は西川広域森林組合と名称が変更になりました。

川上と川下のギャップから情報発信も工場見学会の参加者は年間1,000人に

——日本経済が元気だった時代は、国産材にとっては暗い時代だったわけですね。一般的に国産材は高価というイメージがありますが。

かつて木造住宅は材料重点主義でした。都市部でも和室が2間ぐらいあって、柱には西川か吉野のヒノキ、長押（なげし）には秋田のスギを使って、というように住まい手の関心は木材にあったのです。

ところが、住まいが洋風化してきた昭和50年頃を境に機能重点主義に変わりました。関心が機能に移り、材料はどうしてもよくなってしまったのです。一般木造住宅の場合、木材比率は建材などを入れても建築費総額の15～23%、お客さんの目はシステムキッチンやジェットバスにいています。我々のような木を知る人間は真壁工法（柱がみえる工法）がよいと思いますが、若い人は家具やソファを

置きやすい大壁工法（壁で柱を隠す工法）を好みます。それから、日本人は新しいものがベストなのです。少しでもキズがあると交換だと言います。しかし、木材は生物材料でそんなことを言われたらどうにもなりません。一つとして同じものはないのですから。それよりも十年位経つとこういう色合いになるとか経年変化を楽しむものなのです。そういった特徴を持つ木材と新しいものを好む日本人のライフスタイルが合わなかったということがあるのかもしれない。

価格に関して言えば、国産材はここ10年で1/3ぐらいまで下がって、輸入材と同じくらいになっています。チップやベニヤ板まで含めた国産材率はずっと右肩下がりが続き、2004年には確か18.2%ぐらいまで下がりました。それが2010年には24%ぐらいまで戻りつつあります。それは、国産材が安くなって価格競争力が出てきたからなのです。輸入材と国産材の比率は8対2ですから、輸入材の価格にリンクしているのです。

世界市場の木材の共通価格は、立方当たり約100ドルぐらいだと思いますが、国産材のスギはそれより安くなっているのが状況です。しかし、消費者には国産材は高いという考えが定着しています。特にヒノキはヒノキ信仰というものがあって高級品というイメージが一人歩きをしています。

しかし、一方の川上では1ヘクタール当たり1,000本のスギの木を例えば100万円で売ったとしたら、そこに植林をして下草を刈って成木にするまでにはざっと150万円ぐらいかかる計算になり、成り立たないというのが現



夏休みを利用して大勢の方が親子で参加した〈木琴づくりと山の見学会〉イベント

状です。

川上にいけばいくほど川下の情報は入ってきませんでした。生産業者、原木市場、製材所、材木市場、材木問屋、小売り屋、工務店という流通の中では生産した木材がどこにどう使われているのかわかりませんでした。川上と川下の意識や感覚のずれを感じることもなく、ただ製材をしていただけでした。

プレカット材事業を始めて流通が圧縮され、「西川材を使った〇〇邸」などと使われ方が見えるようになったわけです。そこで初めて、こんなに良い材料なのに売れない、使ってもらえないと言っていたのは、いかにエンドユーザーの要求に応えたものをつくってこなかったからだということに気づきました。

協同組合をスタートしてから15年が経ち、ユーザーの声に応じていくうちに業態が変化して、ある意味で流通業のようになってきています。

今は首都圏で唯一2008年から2年連続で長期優良住宅の先導的モデル事業に採択された株式会社T建設様（本社：蕨市、戸建注文住宅専門）と組んで、西川材の地産地消などをアピールしながら、グレーディングマシン（木材の強度や含水率を測定する装置）を活

用して一本一本のヤング係数（木材の強度）を表示した木材を、高気密、高断熱住宅用に一棟単位でプレカット受注しています。株式会社T建設様では長期優良住宅普及や地元林業への理解を深めていただくためにも木材産地の見学会を実施していて、お客様がバスを連ねてやってきます。山やプレカット工場を見学し、私が山や木にまつわる話をさせていただいています。今の時代は、どんな産業もサービス業としての色彩がなければダメだと言われていますが、林業や木材業も例外ではありません。見学者数は、年々増加して今では年間約1,000名の方がいらしています。

見学会は、ユーザーと面と向かってのやり取りですから、エネルギーが必要です。とにかく見て、楽しんでもらうように心掛けています。正直に言えばかなり疲れる仕事ですが、西川材を知ってもらい情報を発信する重要な事業と位置づけて取り組んでいます。

環境問題が国産材の木造住宅の追い風に 価値観を共有できる人とともに手を携えて

——環境問題のCO₂削減は、木造住宅にとっては追い風だと思いますが。

林野庁の地球温暖化防止森林吸収源対策では、森林のCO₂固定化3.8%と言われていています。対象は人工林で、固定化するのは成長期のもので、老齢木になるとCO₂を吸収して酸素をつくるのが段々遅くなります。だから、人工林をうまく循環させていかなければなりません。よく勉強されてそれを知っている方は、木を切るなどとは言いませんね。都市に木の家をつくることは、都市に森をつくることと同じだとも言われています。

また、木造住宅はこれからどんどん進化するのではないかと考えています。というのは、

関東大震災、東京大空襲、そして伊勢湾台風と続いて多くの木造住宅が焼失しました。それで、都市部では木造住宅は燃えやすくてだめだということになり、1962年から1995年にかけて鉄筋や鉄骨の研究ばかりがされ、木造について学術的研究がストップしていたのです。さらに木造2階建てまでは大工さんの経験と勘で建築すれば、構造計算をしなくてもいいということなどもありました。

それが、今は環境問題や真壁の美的な面、木の安らぎ感などで木造住宅が見直され、地震に強い木造住宅の研究や高気密、高断熱などに木造住宅でいかに対応していくかなどの研究が盛んに始まったところなのです。

——木造住宅のそうした流れの中で、西川材はどのような方向に進んでいくのでしょうか。

日本には約1,000万ヘクタールの人工林があり、その45%が戦後植林した木でいよいよ利用可能な50年生になり、国産材は今後非常に潤沢に出てきます。九州や東北などの大きな産地では集約化が進み、世界のマーケットでも戦えるような生産システムを構築する流れがあります。主に並材の大量生産です。

一方、西川林業地帯は2万ヘクタール規模で、生産される木材は優良材です。ですから、大量生産の並材とは違う戦いをしていかなければいけません。時代の要請に応えつつ西川材ブランドの確立に向けて取り組んでいくこと以外ないと思っています。

先ほど話した見学会では、林業がどんなことをするのかというところから家づくりまでを見ていただくツアーですが、環境問題などに非常に関心の高い人たちが都市部からやってきます。そこでは、50年かけて育った西川材で建てた家に50年間住んでいただければ、50年後にはまた次の家を建てる木が西川林業地で大切に育てられますというような、持続



美しい西川材桧を使用して建築されたM様邸の階段と床

可能な社会の実現という話などをしてしています。そして、そういう価値を共有できる人たちとともに家づくりをしていく。地道にそういうことをすることが地域性に合っていると思います。

良質な原木確保から木質系新素材の開発まで 安心、安全、健康な「西川材」ブランド

——具体的に地域の特性を絡めるにはどんな戦術がいいのでしょうか。

私たちは、西川という森林資源を背景として、安心、安全、それから健康を人々に提供する新しい地場産業を実現したいと思っています。プレカット工場では、確かな材でユーザーとの対話を大切にしながら一棟単位で、一本一本丁寧に品質管理をしながらプレカットをしています。また、木材の「狂う、腐る、燃える」などの質の改良や染色など木材の可能性を限りなく高める処理を木の芯にまで完全に届かせる技術も開発しています。

以前、少し話題になりましたが、実は木材からもホルムアルデヒドは出るんです。しかし、短期乾燥でなく天然乾燥のような形で木材を乾燥すれば、問題はありません。フォレスト西川では、本当の安全というのはどうい



小さなお子様たちの家具「ムックモック」
ブランド、オーダーメイドも可能

うことかまで考えて加工した木材を提供しています。

—木材乾燥や木材含浸処理方法など特許も多数受けていますね。

スギやヒノキでも地域特性があって、九州材と西川材では違うし、同じ埼玉県産材でも秩父材とはまた違うのです。そして、西川材でもいいものもあれば、悪いものもあります。トレーサビリティ（生産履歴）ということもありますが、フォレスト西川の独自の品質基準を決めて、いい地域材だけを出していこうと考えています。少子高齢化の時代背景を考えて、クオリティを担保し、信用につなげていく戦略です。

それが、経営理念の「地域森林資源を活用した社会貢献」であり、常にお客様の立場に立ち、仕事を進め、信頼される企業を目指すことになると思います。そのためには、妥協せず、戦う力を集結します。

—安心、安全、健康な西川材でつくられたおもちゃや家具の製造販売も行っていますね。

小さな子供たちのための家具を「ムックモック」というブランドで展開しています。すべて西川材のヒノキを使い、オーダーメイドでのサイズ製作も行っています。横浜や埼玉県南部など首都圏の幼稚園などからの問い合わせが多く、ネット販売も行っていますが、

ダイレクトにこちらにきて注文をしていくケースも少なくありません。

職員に期待することは、まずは挨拶から 好きな言葉は、「失敗から学ぶ」

—職員に期待することはなんですか。

たくさんの方々に、工場見学にきていただいています。挨拶がなかなかできないんですね。ものづくりといえどもサービス業の側面もあるので、まずはしっかり挨拶をするようにと言っています。

協同組合を設立してから15年ぐらいが経ちましたが、「失敗から学ぶ」ことは非常に多いものだと感じています。

—木造住宅について、知っているようで知らないことばかり。国産材の木造住宅を建てるのが地球温暖化防止に貢献することなどとても勉強になりました。西川材をどんどんアピールして、地域林業と環境に貢献していただきたいと思います。

本日は、ありがとうございました。

協同組合フォレスト西川概要

設立	1993年
資本金	1,500万円
組合員	大河原木材株式会社 町田木材 株式会社梨木建設 マルハラ 西川広域森林組合
売上高	6億300万円（2009年3月期）
従業員	15名
事務所	〒357-0013 埼玉県飯能市芦荻場708-1
電話	042-971-2622
ホームページ	http://www.forest-nishikawa.com
取引店	飯能支店